



# 岐蘇林

## 目次

### 論說

登山の効用

國防と山林

### 文苑

修學旅行日誌

### 和歌

二見浦の夕

去年のたび雑詠

### 雑報

學校便り

宿舎便り

會員異動

其他

〔日四十月六年四十四治明〕  
〔可認物便郵種三第〕

日五廿月每  
行刊期定

號參拾九第

日五廿月七年六正大

## 論說

### ◎登山の効に就て

西澤生

近來一般に山岳崇拜の思想が餘程高まつた様に思はれる、何して此の思想が斯く高まつたかと云ふに、之れには種々の關係があらうと思はれますが、余は思ふ。其の主たるものは、浮世の塵から遠かつた、白雪皚々たる靈山の浩氣に觸れて、大いに剛健の氣象を養ふと共に、高山に於ける動植礦物の研究等を遂げんが爲めである、即ち山は空氣が清潔で、高く俗界を離れ、又眼界が廣くあつて次第に自然に接する所からして一度登山すれば幽邃曠濶にして、心を慰し氣を散じ、體育の素を養ひ、何となく山には神仙の氣が満ちて居るからである。

故に山には斯様の靈氣があるから、何處の山住民の氣象も必ず高潔であつて、巖石の硬ライたるが様で、氣骨も自ら稜々たる所がある、尙山は神聖である云ふ思想から、昔より仙人とか聖人とか謂はれた人は多くは山中に立ち籠つて修業を積んだものである。釋迦は雪山に入つて禪思を凝らし思想を作つたと謂はれて居る、此の他の人も修業をする時には、山籠をして俗氣を去つて神々しい氣象を養つたものは少くないのである、蓋し山中には神秘あるものがある、此處に至れば冥々の内に所謂海拔の高い、空氣の稀薄、氣温の寒冷、草木繁茂

の事情等が生理的若くは心理的作用となつて、遂に何となく、山は靈氣満々たる様に感ぜらるゝのてあると思はる。

上述の如くにして、山の人心に及ぼす影響が頗る大なるものとせば、今後、社會に出で、大小となく事業を爲さんとする者は宜しく身體の強弱、時間、勞費の許す限りに於て、登山を試みて神秘を探り、高尚幽遠なる靈氣に觸れて、高潔なる氣象を養ふは最も必要なことと思ふ。然るに、登るべき山に依りては、季節を選ばざれば氣温が低くなりて寒氣の爲め降雪、濃霧を生じ、暴風の爲め飛砂ありて、行路を失ふことあるを以て、此等の季節につきては、最も注意を要すべきことと思はる、故に勿論夏季を以て最良とする。殊に學生等は平生は學校の勉學あり。青年及び紳士連も皆それれ務めがあるから中々登山などの暇が無いけれども、夏季になれば彼の暑中休暇を得るから、此の期は實に學生、青年並に紳士等に對する登山の好時期である、又年中頭腦を使用する者は、時々腦の休養も必要にして、此の休養上よりしても、空氣清潔で氣温低く、山氣満々たる土地が養生地として適當であると思ふ。又近來は夏季に至れば海水浴が流行して來ました、元來日本は海國であるから、海國氣象を養ふには海邊へ行つて舟を漕ぎ、海に泳ぐなどは實に必要のことでもあり、殊に身體に因つて海水浴療法も必要ではあるが、我が信州の様な

何處に行つても雄大なる山ならざるはなき處  
では、學生及青年などは、須らく山中に於  
て夏期を過し、精神の修養、身體の保養に  
務められんことを、近くは來らんとする夏  
季休暇等は實に見逃すべからざる好機であ  
らうと思ふ。

終りに一言せんに、山岳の靈氣に觸れる  
ことの心身修養上の大利益なることは既に  
述べたる如くであるも、往々世間には血氣  
に走りて、充分に期節、天候、地理、身體  
の強弱等をも顧みず、徒に冒險を爲すもの  
のあれども、之等は主に登山者の注意すべ  
き事柄で警告してをきまず、而して此の激  
烈なる生存競争の活社會に活動する人々は  
實に樂しくもあり又非常に愉快あることで  
あると、同時に須らく精神の修養、身體の  
強健なることが必要である、之れが爲めに  
は他にも良法あれども亦其の一として登山  
を勧めて止まざる次第である。(完)

◎國防と山林

大坪 時 治

雲を呼び風を捲きて生じたる歐州の戦亂は  
いつはつべしとも定まらず砲彈徒に喰り歳  
月空しく流れてベルダン城塞決潮の勢もて  
押し寄せし獨軍の包圍攻撃を耳にしてより  
月を閲する事此に幾度  
然して吾人が時々刻々報導する新聞紙上に  
於て其の攻防戦闘の情況を見るに悲惨酷烈  
にして人類平和生存の爲大いに惘然の情に

堪へざるものあり試に思へ朝にはフルレン  
の野に軍刀をとりし猛將も夕べポーランド  
の露と消に嚴寒月は凍つて波獅子吼する北  
海の怒濤に獨艦艇の封鎖を行ひ其の警戒に  
心膽を碎きたる雄風颯爽の英將も曉にたぐ  
艦橋の霜に夢未だ圓ならざる内早くも潜艇  
一發の魚雷は彼が温夢を破つて堅艦浮城を  
トバーの藻屑と化せしめ武將の生靈空しく  
消れて骸はあへなく魚族の腸を肥す  
空雷は又無辜の良民を苦ましめ三軍の叱呼  
喊聲は耳を壓して山野に滿ち流血は淋漓と  
して杆を漂はし兵士の魂魄野に迷ひ獨體雨  
に悲しめど葬るに人なく哀れ餓餓は道に横  
たはり悲劇慘劇の情眼前に遺憾なく展開せ  
らる嗚呼慘たる哉悲たる哉

然り而して縦合戦争なる一事が惨又悲あり  
と雖も地球表面上に棲息する人類を民族でふ  
種別に構成したる以上は其の各個なる民族  
の獨立生存上必ずや戦争なかるべからざる  
あり即ち戦争てふ一變動ありて始めて民族  
は進化し分化し生存し適者生存の原理に叛  
かす其の消長を全うするものなり  
世に戦争なく戦勝あからんには民族の興亡  
又哀むの外なし希臘の隆盛埃太の文化皆戰  
勝の賜ものならざるはかく露佛伊英の今日  
ある建國の基も又彼の四面楚歌裡にありて  
尙頑強に戦ひつゝある獨逸の今日ある所以  
も共に戦勝の恩恵に依りたるものと云はざ  
るべからず殊に獨逸の如きは彼のビスマー  
クの手により普魯西の小國より起る普佛戰

及ばず事は火を見るより明かなるべし此の  
類に於ては余の觀測に止らず世界識者一般  
合致の意見とも見るべきものにしてよしや  
獨逸如何に聯合軍の爲に打破せらるゝとも  
國を亡すには至らず英國如何に傷けらるゝ  
とも一等國の位置を失墜する事は萬なかる  
べし佛伊又然り露國に至りても革命内訌の  
爲囂々として萬波起伏し到底濟ふ可からず  
とし第二の支那と做する者あるも余の見解  
に於ては尙世界の大國腐つても鯛の名は失  
はず假令第二の支那とすも支那其物さへ  
衰倒れ黎黎張氏又復辟を主張して權勢を  
一掌の内を集めたるも東の間に一朝にして南  
地子天壇に段軍の爲破碎せられ勢力漸く段  
に歸せんとするが如くあるも尙馮氏の睥睨  
するあり斯の如く變幻出沒秋日の如き雲行  
きあるに尙其の國命を繋ぎつゝあるを思へ  
ば如何に腐敗糜爛すればとて露國尙容易に  
侮るべからざるなりまして露國戦勝の桂冠  
を戴く事を得ずんば彼れは國を擧げて東漸  
の策を緩する者に非ず何時かは宴婦を嚇し  
得て再び遼河の河岸に鮮血を漲らしむる事  
あるべし獨逸英佛又然り見よ歐州の天地は  
既に既に權勢の均等を得て寸歩の地も國勢  
伸張權力附植の餘地なし故に彼等は比較的  
侵入に容易ある支那の野に野心を抱擁して  
之を併呑せん事を夢みつゝあるなり又單に  
歐州列強のみならず比較的入道を主張する  
平和主義を標榜しモンロー主義を主張する  
米國に於てすら榮頤延々として支那を自家

争に打勝ちて爾來隆々今日に及び世界と錦  
を削る置位を築き上げたるは人のよく知る  
處なるべし  
斯く論じ斯く綴り來らば戦争又國家開拓の  
具のみ即ち是ありて國の文明を知り文化を  
悟り而して民族の保存を全うす  
幸か不幸か我が帝國は土地の邊陲に在るこ  
天與の恩恵に依りて纔に青島の一小黒子  
に食指を動かしたるのみにして目前の大渦  
亂を超然阻隔して高台に活演劇を見るが如  
く或は又對岸の火事場を仰視するが如く平  
然として鵝蚌の争漁夫が好餌と心得戦亂が  
産める我が國益を金輪際かはらぬ物として  
鼓腹を鳴らし一盃の狂酒に三春の醉未醒め  
ず昏々として惰眠の境に低迷沈淪して其底  
止する處を知らず大難將に頭に降らんとす  
れども警告の聖者なく自誠の智者なし一時  
の成金に鼓を打ちて青樓に舞ひ虚榮に憧れ  
ては藝もなき自働車驅つて紳士を擬する巨  
漢はあれど國を憂ふる識者なし

嗚呼多感の國民よ今日唯今此の昏睡より覺  
めずんば鐵槌の忽ち其の身に及ばん其期に  
及びて先非を悔ゆるも時や既に遅かるべし  
臚に綱縲の日目のあたり非ざるなきや  
讀者諸君よ我が名を呼びて徒に慷慨家とな  
す勿れ極端論者となす勿れ樂天は吾人の生  
命なり快活は吾人の本性なり誰れか胸中愛  
國の至誠なからんに於ては帝國の現狀が大  
危機に逢着しつゝある事を知りて是を看過  
する者あるべきまして事實の前に曲論あら

藥籠中のものとせんす勢を示しつゝあるな  
り假令米國辭令を巧妙にし遁辭を逞しうす  
るも彼が支那に及ばせし手段の事實は掩ふ  
ども掩はれず明かに其の足跡を殘せり其  
證據や遠きを追ふの必要もなく去る六月中  
旬突如として彼が發したる對支警告あるも  
の即ち歴々たる裏書に非ずや元來米國は對  
支内政干渉的警告は米國が政治的に支那を  
壓迫するものありとて借款團を脱退しなが  
ら今日の日本の舊の日本に非ず日支の關係  
又昔日の比七同じからざるを知りつゝ何等  
意に介せざるものゝ如く絶東の平和を掌握  
する日本を出し抜き警告を發したる如きは  
明かに國際通義上帝國を侮辱したる精神よ  
り出でたるものと云ふべく又彼が野心の情  
抑へ難きをも知り得べし  
時に我が國々論の激昂を來し爲に當局の對  
米質問とあり米國其の前非を悔ひて日本國  
論の激動を惹起したるを遺憾とし全く誤解  
に因るものなりとて只管他意なきを辨明反  
省し對支干渉計畫を拋棄して日米國交に何  
等動搖なきを示して幸に事なきを得たり  
是によりて當面の解決は終了したりと雖も  
米國根本の國策を剪除したりと云ふが如き  
は大なる誤りにして米國も又遠き將來に於  
て彼我何れか國勢の均等を失ひたる場合に  
は必ず我が爲に災難の一大因子たる資格を  
失はざるものなり  
幸にして米國が今日を限り斷然支那に政治  
的干渉を斷念するが如き事あれば極東の平

んや詭辨あらんや我れ又曲學阿世の徒豈に  
非ず治に居て亂を知る此れ爲政治家の訓言あ  
らずや世は明治に次ぎて大正の聖代ありと  
雖ども暗雲は往々東亞の中腹に徂徠し大平  
の洋上に隱現出沒していつ霹靂を生せん  
も測りがたく危機刻々に迫り來るあ、現代  
青年にして大平の夢に現をぬかし居るべき  
秋ならんや

余輩又識者に非ず聖者に非ず爲政者に非ず  
然らば何者ありや然り一個の措大あり憂國  
漢あり身賤く心小さく茫々たる草叢中にあ  
りて世人に知らるゝ處に非ざるも國を憂ふ  
るの情に至りては大言壯語に似たりと國務  
を掌る大臣大將にも劣るまじき強き自信を  
有するなり故に其の情に至りては切にして  
言はんとする言や又痛切慷慨に似たり然し  
て余が云はんとする國家の大危機とは何ぞ  
や是れ即ち戦後に於ける我が國前途の消長  
盛衰の運命これなり讀者よ余が爲に貴重  
の紙面をさき我が素懷を述べし事を容せ扱  
て世界大戰の結果を余が今日喋々大言するは  
恰も井底の蛙に類する思議ならんも其の一  
斑を論せずんば我が論調の道行不明なるを  
以て聊か之を述べんこと勿論世界現今の大  
勢は神たりとも知るべからざるに神からぬ  
身の余輩が容易に知り得べき處に非ず敢て  
是を決定的に云ふが如きは危険之より大  
るはあく愚又是より骨頂あるはなし然りと  
雖も戦亂最後の結果は何れの國に於ても其  
勢力を東亞に移し逐鹿界を支那中原の野に

及ばず事は火を見るより明かなるべし此の  
類に於ては余の觀測に止らず世界識者一般  
合致の意見とも見るべきものにしてよしや  
獨逸如何に聯合軍の爲に打破せらるゝとも  
國を亡すには至らず英國如何に傷けらるゝ  
とも一等國の位置を失墜する事は萬なかる  
べし佛伊又然り露國に至りても革命内訌の  
爲囂々として萬波起伏し到底濟ふ可からず  
とし第二の支那と做する者あるも余の見解  
に於ては尙世界の大國腐つても鯛の名は失  
はず假令第二の支那とすも支那其物さへ  
衰倒れ黎黎張氏又復辟を主張して權勢を  
一掌の内を集めたるも東の間に一朝にして南  
地子天壇に段軍の爲破碎せられ勢力漸く段  
に歸せんとするが如くあるも尙馮氏の睥睨  
するあり斯の如く變幻出沒秋日の如き雲行  
きあるに尙其の國命を繋ぎつゝあるを思へ  
ば如何に腐敗糜爛すればとて露國尙容易に  
侮るべからざるなりまして露國戦勝の桂冠  
を戴く事を得ずんば彼れは國を擧げて東漸  
の策を緩する者に非ず何時かは宴婦を嚇し  
得て再び遼河の河岸に鮮血を漲らしむる事  
あるべし獨逸英佛又然り見よ歐州の天地は  
既に既に權勢の均等を得て寸歩の地も國勢  
伸張權力附植の餘地なし故に彼等は比較的  
侵入に容易ある支那の野に野心を抱擁して  
之を併呑せん事を夢みつゝあるなり又單に  
歐州列強のみならず比較的入道を主張する  
平和主義を標榜しモンロー主義を主張する  
米國に於てすら榮頤延々として支那を自家

及ばず事は火を見るより明かなるべし此の  
類に於ては余の觀測に止らず世界識者一般  
合致の意見とも見るべきものにしてよしや  
獨逸如何に聯合軍の爲に打破せらるゝとも  
國を亡すには至らず英國如何に傷けらるゝ  
とも一等國の位置を失墜する事は萬なかる  
べし佛伊又然り露國に至りても革命内訌の  
爲囂々として萬波起伏し到底濟ふ可からず  
とし第二の支那と做する者あるも余の見解  
に於ては尙世界の大國腐つても鯛の名は失  
はず假令第二の支那とすも支那其物さへ  
衰倒れ黎黎張氏又復辟を主張して權勢を  
一掌の内を集めたるも東の間に一朝にして南  
地子天壇に段軍の爲破碎せられ勢力漸く段  
に歸せんとするが如くあるも尙馮氏の睥睨  
するあり斯の如く變幻出沒秋日の如き雲行  
きあるに尙其の國命を繋ぎつゝあるを思へ  
ば如何に腐敗糜爛すればとて露國尙容易に  
侮るべからざるなりまして露國戦勝の桂冠  
を戴く事を得ずんば彼れは國を擧げて東漸  
の策を緩する者に非ず何時かは宴婦を嚇し  
得て再び遼河の河岸に鮮血を漲らしむる事  
あるべし獨逸英佛又然り見よ歐州の天地は  
既に既に權勢の均等を得て寸歩の地も國勢  
伸張權力附植の餘地なし故に彼等は比較的  
侵入に容易ある支那の野に野心を抱擁して  
之を併呑せん事を夢みつゝあるなり又單に  
歐州列強のみならず比較的入道を主張する  
平和主義を標榜しモンロー主義を主張する  
米國に於てすら榮頤延々として支那を自家

和は永遠無窮極まりなき處なるも既に潮り米國々務卿ヘー氏が門戸開放機會均等の主義を唱へ支那に於ける他の既得權までも此美名の下に無効ならしめんとしたる時より又國務卿ノックス氏が滿州鐵道中立を提唱したる時より又國務卿ブライアン氏の下にすら米支密約によりて島嶼港灣の租借造船所の買収等の計畫を進行せし時より國務卿ランシング氏に至り對獨斷交に關する單獨勸告となり秩序回復に關する出し抜きの勸告となれるまでの徑路を辿り又其間石油鐵道鑛山等に關する米支の契約に徴し今昔を通じて回着考察すれば將來亦何れの時にたいてか支那に對して大々的政治行動を起し來るなきを保し得べからざるなり若し米國にして將來支那に何事かを爲さんとする野心を絶たざるものとすれば日支の兩國は永遠に不安危懼の念を絶つ事を得ず日本の大なる努力に基く日支親善によりて確保せられたる極東の平和は寧ろ平和主義を標榜せる米國の爲に脅威せらるゝ處となるべし此の如きは日支兩國の共に堪へ得ざる事にして假令支那にして斯る惡影響を排除する力なしとするも斷じて帝國の存立する以上は國力を賭しても其排除に努めざるべからず況や日本の興廢存亡にも關する重大事なるに於てたや余輩筆を茲に運び來り靜然默思しつら／＼前途を考ふれば今や國家は一大危機に逢着しつゝある事を覺ゆる筆は戰々として進まず

稿をやめて戸外に出づれば星光燦として天に滿つ空拳を磨て天を仰いで嘆息の太息をつけばあたりの景物に響きあり嵐々たる民は蠢早として靜かある夜を夢む嗚呼可憐の彼等は汝が住む國家の危急を知るや否や木曾川は滔々として不斷のひびきを断ち御料の嵐は颯然として膚に寒し(未完)

文苑

◎第三學年修學旅行日誌(承前)

五月二十六日 土曜日 晴天

終夜夢を弄びし吉野の流の岸に下り立ちて嗽ぐ一掬の水の清冽なる困眼も俄かに瞭然となりつゝ曉の霧、谷間に迷ひ、曉の雲、大空に走り、曉の氣、膚に沁み、曉の露、青葉に凝る山中の朝、比類もあらずめでたし吉野林業、總身紺に扮裝てる小土倉翁に從ひて彼が誇りとする山林に入りぬ曉露、樹梢にあり幽草、微風に戰ぐ所に立ち亭亭たる老杉を指しては其の成長と利用を語り、陽光金箭をかし幽花禽啼に領く處に踞し萎靡たる幻樹を引きては防兎の方法と被害を説く小土倉翁、眼光、美はしく顔艶やかにして有徳の君子あるは其の眉宇にもしるく代々崇高ある山林を相手にせる尊さを現はしたり

たしめめたる技倆を誇るも憎からず覺わし見上げ見下ろす谷又峯地として木からざる赤く木として手入れせざるかし、而も木といふ木、通直完満、無節無枝、木膚甚だ美なり、宜なり良材美質の標本、密植間伐の眞髓、人工造林の權威として天下に誇稱せらるるや、言ふをやめよ吉野愛林思想は分木制度に起因し根本は利額にありと、愛林は彼等の宗教あり撫育は彼等の日課なり、見よ心なき兒童まで仆れしを起し伏せしを立て殊に兎害の豫防は二にかゝつて彼等の手中にありと云ふにあらずや、説明到らざるかき小土倉翁に揖して吉野山に向ひつ吉野山、鹿のみ通ふべしと思はるゝ山坂を越え行けば「懸て出でじと思ふ身を花散りかば」と待つらん人をよそに捨於一切諸有爲諦觀眞如乞食活と松吹く風に心耳を澄ましたる西行か庵のあたりをを奥の千本とぞ呼ぶある、附近に苦清水あり青苔巖を封じて冷水滴る「淺くともよしや又汲む人もあらじ」と歌ひけを又汲む人となりて骨に徹する水に咽喉を潤しぬ、金峯神社に立ちより水分神社に到る、こゝに忍辱柔和の相を現せる西行が像あり、庭前の小桶に清水満へて旅人に分つに水分の名に因みてやいく程もなく抱餘の枯櫻空しく天空を刺すあり、是なん久方の雲井の櫻あり、人事時に非にして萬乗の御身を以て向かふる深山に常に變らざる花に吟詠を寄せたりけん御心を察し進らざるも涙の種なり、左の小阜

を花矢倉と云ふ、忠信血戰の遺跡也、落ち行く御曹子を見送りに心靜かに矢をや防ぎけん香しき名は今も残りこの處より隘路を辿り上千本を過ぎ行けば松柏鬱茂せる處落尾御陵なり、萬感胸に徂來しつゝ石階を進めば松柏杉檜を錯へ蟠根碧苔を重ねて一邱を護る、謹んで拜すれば建武中興の英主萬劫盡きざる御怨恨と共にここに眠らせ給ふ、在りし昔を追憶すれば感涙滂沱として禁する能はず、折りしも颯々たる薰風一過して樹梢の蟬聲一際高く無心の小虫英魂を吊ふとぞ見ゆし

神に到る、背後に鬱蒼たるは袖振帽にて其の昔大海の皇子の難をこゝに避け給ひし時祠前に神樂を奏せしに忽ち雲中に霓裳羽衣の天女あり髣髴として立ち現はれ袖を翻じて舞ふこと五度に及びしと云ふ、峰の白雪踏み分けて入りし人を忍びつゝ降り來し一織女、心なる衆徒に法樂を演せしめられたるもこの處なりとぞ、さて花に寝てよしや吉野の吉水の神社に詣てぬ、主上嘗ては此處に假居し給ひ、逆賊討滅の御企てをあし給ふ、其折の枕の下に石はしる音今尙潺々として止まず、春深くして樹は森々たり昔還荒れ、杜鵑愁ひ、蟬聲悲み下神を傷ましむ、「春深來吊南朝迹、古社無人鎖夕陽」嗚呼何等の好調ぞ、藏王堂は金峯山寺の本堂にして山内第一の巨刹なり棟梁柱檣の類堅牢巨大の良材にして規模雄大、宏壯ある事備少し、元弘三年閏二月一日大塔宮敗戦し給ひし時、最後の酒宴を張りしは前庭四本櫻の邊ありと云ふ、落ち行く宮を見送りに我が節足れり一笑し、腹を劈き腸を把りて抛てば血は樽壁に迸りて唐紅を染め十萬の賊軍の肝膽を奪ひけん忠臣の跡もこの處とぞ聞ゆし

奈良大佛鑄造の剩餘にて作れりと云ふ發心門を過ぎ行けば七曲り坂、攻が辻等あり此の近傍を一目千本と言ひ、花時彩雲、谷を埋め爛漫たる光彩は人目を奪ひ覆郁たる香氣は天地を薰染して人をして恍惚、春風と共に飄揚せしむとなり、降り降りて檜杉茂れる阜に村上義光の墓碑あり、前に百峯を望み後に萬櫻を扣ふ、君が没後幾足霜樺華に埋れ虫聲僅に英魂を吊ひしが去る年天恩枯骨に及び從三位を贈られたり、吉野宮に至りては輪奐結構、壯麗にして巖巖の氣溢るゝを覺たり、一休して後老櫻梢枯れ、路草繁き舊道を辿り行けば柳の渡も遠からず見返れば芳山夕陽を浴びて靜に眠り、芳川潺湲として繞り流る、河鹿、銀鈴を振る六田の渡を過ぎて吉野驛に到る、吉野驛より汽車に乗じて高野口に向ふ

五月廿七日 日曜日 晴天

正風生

高野口出發 午前五時早くも淡い曉の夢は破られ草鞋姿の甲斐／＼しい裝束に身をかけた二同意氣揚々として往復八里の道程高野國有林視察高野山參詣の日程を果さんものと六時しのゝめ館を後に出發す

高野山國有林 一步一談徐々として進むに従ひ次第に坂路とあるあたりの山々には杉松其他の雜木等茂り木材軌道運搬の實況を見學せり一臺のトロには十尺内外の木材を積むことが出來他の方法に比し最も經濟的にして大いに運搬費の節約が出來ることの事なり數丁目／＼毎には休憩所ありて參詣人の杖をひく頭上には絶えず鐵索運搬の呻りを耳にすこれにつき同會社の一員は「箱の長さは大方五尺幅は三尺位であつて二間材位は大丈夫運搬することが出來る然

し乍らこれは間々中空より落下し非常に危  
険なるが故に人畜は絶対に乗る事を厳禁さ  
れて居るが乗つて見れば中々愉快だ」とさ  
も得意げに云ふ更に進めば山は愈々深く谷  
は愈々迫りて吾が木會にもたごらぬ大森林  
をなし秀峯峻嶺は翠を攢め嵐を曇み溪水は  
潺湲として自然の琴を弾す當國有林は林相  
甚だ密なる天然林にして伐木は明治三十八  
年頃施業案を編成し年伐材積を六萬尺に  
して年々造出する成材積は四萬尺内外と  
の事あり伐採樹種中最も多きは扁柏にして  
金松、樅、松、榎及雑木等漸次これにつぎ  
樹齡は百七八拾年頃より二百年或は三百年  
を経たるものもあり聞く急勾配の不動坂  
も何のその十數分にして越ゆ女人堂にいた  
るこの地高野口を去ること三里廿六町時方  
に九時三拾分

高野山 俗界を去ること遠く海を登るこ  
と三千尺山頂の台地には所謂九百九十ヶ寺  
を配し堂塔參差たり就中金剛峯寺は眞言宗  
の大本山にして規模宏壯幽寂にして實に海  
内第一の靈刹たりされど山上の俗化の點に  
いたりては前號に於ける宮川先生の紀行の  
如く靈場などは思はれず實に慨歎に堪へ  
ざるものあり音に名高き刈萱堂を右に眺め  
奥の院へと杖を曳く數百年を経たる老樹は  
天に參り鬱々葱々たり奥の院は弘法大師入  
定の地として普く知られ香煙縷々として上  
り今尙往古の事蹟を語るが如し道の左右に  
は累々たる石碑十數町の間に連り中には諸

大名の石碑等も見受られたりこゝに芭蕉翁  
の碑ありて碑面には「父母のしきりにこひ  
し雉子の聲」と刻せり其他不動堂、御影堂  
六角輪堂、孔雀堂等に參詣して歸路につく  
吾等は砂走りの勢にて下山隊をぬくこと數  
行一時間平均二里の早さにて高野口に歸る  
踵を回して高野山上を眺むれば高爽脫塵の  
境も今や薄雲模糊として辨する由なし  
高野口出發 午後四時四十二分汽笛一聲  
汽車は夏の雲間に塔見ゆるこゝ高野口を發  
し悠々たる紀ノ川の岸を走れり  
笠田 山は近けれどもや、廣き平野をな  
し竹林の良好なるもの長く續きたるを車窓  
より望む

岩出 あたりの山々には密柑の栽培多し  
有名なる紀州密柑の本場は有田川沿岸なり  
とさく  
和歌山市着 わかやまよと呼びたつる  
車掌の聲に夢を破られし二三の君の周章狼  
狽の態も物笑ひの種とありそれより一哩ば  
かり車にゆられて午後六時廿八分無事と歌  
山市驛に下車し歩を運びて九橋館に旅装を  
解く  
五月廿八日 月曜日 晴天  
星 水

佳にして淡路島は手に取る如く晴れたる日  
には讃州さへもよく見ゆと云ふ山頂に茶店  
あり店主甘言を弄して客に媚び名物さぞ  
稱して頻に土産物を勧む一行は此處に荷を  
下して暫くは恍惚として四圍の景色に心奪  
はれたりしが多忙なる身は時間に迫られ十  
時と云ふに山より下り海岸凡そ三十町ばか  
りは歩みたり時しも干潮にて名も知らぬ蟹  
の我等の足音を聞きか早くも逃げ行く様  
いどをかし此處で一行は正午迄に和歌山城  
に集合の事を約して解散を命せられ三三五  
五分れ行きて電車に乗るあり健足を誇るも  
ありしが正午には何れも和歌山城めがけて  
押しよせぬ  
和歌山城 舊徳川御三家の一ある紀州候  
の居城たりし所城は壯大ならざれども今猶  
天守閣巍然として聳ゆる老松古木千古の緑を  
籠め白壁此に映じ風趣云はん方なし登りて  
見るに城は市の中央に位し一目にして全景  
を收む城を辭して和歌山驛より二時三十分  
の列車にて大坂に向ひたりしが二時間にし  
て到着し吉野館に投宿せり(未完)

第二學年修學旅行日記(承前)  
五月廿五日 金曜日 山本 茂  
聞きしに勝る天下の險箱根拔涉に疲勞せし  
體軀も元の湯温泉に醫せし一同は元氣彌が  
上にも加はりて六時半旅館を出で七時四十  
一分湯本發の電車に乗りて此仙境を後にす  
行くく、車上ながらに二ノ宮神社を拜し小

田原城跡を見、左には白波打碎くる相模灘  
を眺めつゝ國府津に着き九時十分汽笛一聲  
諸共に小ゆるぎもなき東海道列車にて國府  
津を離れて海水浴場として名高き大磯等も  
瞬く間に後になして大船に着き此處にて乗  
換へ支線を横須賀に進む左には優美なる逗  
子田浦等の海邊を眺め數多のトンネルをぬ  
けて横須賀に着き直に軍港に至る待つこと  
數十分にして案内將校に導かれ港内に入る  
先づ第一に十二吋砲射試をさせる尺餘の鐵  
板を見砲彈の力の偉大なるに一驚す工廠内  
には佛蘭西よりの注文に應じて目下製造中  
の大形驅逐艦二隻有り。今を去る五十年前  
に於てはペルリの引辛し來りし小軍艦すら  
驚異の眼を張り居たる我國の此長足の進歩  
には今更ながら驚かざるを得ずドック内  
には飛行母艦、若宮丸、本邦最大軍艦山城等  
修繕中あり港内に淀泊せるは金剛、榛名を  
首めとし山風、海風等の驅逐艦が十數隻  
藤々たる黒煙を吐き威風堂々たり我等は現  
今帝國海軍の新精銳ある河内の參觀を許さ  
れぬ全部を三隊に分ち各案内者に従ひて上  
甲板より艦底に至るまで詳細なる説明を聞  
きつゝ一巡し海軍生活の如何に規律的に且  
雄壯なるかを感じり本艦は噸數實に二萬八  
百噸長さ五百二十六呎巾八十四呎にして十  
二吋砲十二門六吋砲十門を備へ當工廠製造  
にかゝり四十三年進水にして千五十二名の  
乗組員を有する一大浮城なり艦内には其名  
に因みて楠正成公を祀れりと參觀を了し陸

田原城跡を見、左には白波打碎くる相模灘  
を眺めつゝ國府津に着き九時十分汽笛一聲  
諸共に小ゆるぎもなき東海道列車にて國府  
津を離れて海水浴場として名高き大磯等も  
瞬く間に後になして大船に着き此處にて乗  
換へ支線を横須賀に進む左には優美なる逗  
子田浦等の海邊を眺め數多のトンネルをぬ  
けて横須賀に着き直に軍港に至る待つこと  
數十分にして案内將校に導かれ港内に入る  
先づ第一に十二吋砲射試をさせる尺餘の鐵  
板を見砲彈の力の偉大なるに一驚す工廠内  
には佛蘭西よりの注文に應じて目下製造中  
の大形驅逐艦二隻有り。今を去る五十年前  
に於てはペルリの引辛し來りし小軍艦すら  
驚異の眼を張り居たる我國の此長足の進歩  
には今更ながら驚かざるを得ずドック内  
には飛行母艦、若宮丸、本邦最大軍艦山城等  
修繕中あり港内に淀泊せるは金剛、榛名を  
首めとし山風、海風等の驅逐艦が十數隻  
藤々たる黒煙を吐き威風堂々たり我等は現  
今帝國海軍の新精銳ある河内の參觀を許さ  
れぬ全部を三隊に分ち各案内者に従ひて上  
甲板より艦底に至るまで詳細なる説明を聞  
きつゝ一巡し海軍生活の如何に規律的に且  
雄壯なるかを感じり本艦は噸數實に二萬八  
百噸長さ五百二十六呎巾八十四呎にして十  
二吋砲十二門六吋砲十門を備へ當工廠製造  
にかゝり四十三年進水にして千五十二名の  
乗組員を有する一大浮城なり艦内には其名  
に因みて楠正成公を祀れりと參觀を了し陸

に上る時遙か沖合に小舟の如く見ゆる有り  
そは去る一月不幸にも火薬庫爆發の爲沈没  
したる筑波の司令塔なりと聞く此處を辭し  
て支線を再び鎌倉に返り八幡宮に參拜しぬ  
彼の公曉が實朝を弑する時かくれ居たりし  
と云ふ銀杏は今尙巍然として中空に聳ゆ夫  
れより東なる頼朝の墓を訪ふ住時の盛事夢  
の如く只荆棘茂れる中には蒼苔滑かなる五  
重の石碑、田畑と化せる昔の幕府の跡を守  
るのみ更に東して鎌倉宮に詣て護良親王の  
幽閉せられ給ひしと云ふ岩窟を吊ふ九重の  
奥深く長せられし御身が朝敵を滅さんと謀  
をめぐらしつゝ却て逆臣の讒訴に逢ひ此岩  
窟の露したる所に名もなき一逆臣の手に  
かゝり萬斛の恨を呑んで御命を落し給ひし  
かと思へば水聲恨を訴へ禽語悲を傳ふ如き  
心地す此處より歩を返して建長、圓覺、長  
谷等の古寺をたづね極樂寺坂を通り稻村ヶ  
崎をぬけ夕映を身にうけつゝ足にまかせて  
七里ヶ濱を江の島にと向ふかくて腰越の古  
蹟もさぐり江島ある金龜樓旅館に投ず

五月廿六日 土曜日 箕部 覺明  
『まだ起きないんですか』と遠慮もあいな  
女は布団をたぐんで來る皆はたまらぬの  
で飛起きた。  
眞紅の太陽は既に小坪の沖を離れ光は海に  
映じて黄金の波を漂せてゐる。島は周廻壹  
里餘一番頂と思はるゝ所に老木生ひ茂つて  
其中に神々しい神が祭られてある其の境内

を通過つて岩窟に行つた途中名物貝細工が見  
事に飾られてある番の者が「貝細工も色々  
あります御土産に一ついかがです中へた入  
なさい見るは目の肥になります」と五月蠅  
い程呼んで居る細道を下つて行くと遙かの  
海中に鳥帽子岩が見ゆるすぐ下が稚兒が淵  
だそこから少し迂廻して崖を下ると岩窟で  
ある中に辨才天が祀つてあつた。そこを出  
ると海人が居て貝を拾はして呉れとさきり  
に云ふ、面白からんと卅錢を投じた其業の  
巧なる事眞に海の人である。時間も迫つて  
來たので別れを惜む棧橋の音を後に江の島  
を辭した。  
電車は數知れぬ松を後へへとひた走りに  
走つた。藤澤にて汽車に乗り換へた。僕等  
一行を乗せた汽車は東京さして進んだ。間  
もなく本邦第一の開港場横濱も過ぎて刻一  
刻と昔への武藏野今の東京府に入込むので  
あつた。空を突く様を數知れぬ煙突は黒い  
煙を横たへてある西洋造りの高い家も此所  
彼所に見ゆる。僕等は東京市に入つたので  
ある。僕等の心はをどつた。東京驛にて下  
車した。電車自動車は縦横に走つて帝都の  
雜然たるに一驚せざるを得なかつた。直に  
宮城を參拜した。二重橋前にて最敬禮をな  
し老松の隙より遙かに殿閣を拜し奉れば神  
々しき事限りない。參拜も終つて神田三崎  
町なる三崎館に行つた。一休してから小石  
川の後樂園に行く緑樹蒼蒼として泉石の妙  
を極め涼氣肌に浸みて其の心地よささも

に上る時遙か沖合に小舟の如く見ゆる有り  
そは去る一月不幸にも火薬庫爆發の爲沈没  
したる筑波の司令塔なりと聞く此處を辭し  
て支線を再び鎌倉に返り八幡宮に參拜しぬ  
彼の公曉が實朝を弑する時かくれ居たりし  
と云ふ銀杏は今尙巍然として中空に聳ゆ夫  
れより東なる頼朝の墓を訪ふ住時の盛事夢  
の如く只荆棘茂れる中には蒼苔滑かなる五  
重の石碑、田畑と化せる昔の幕府の跡を守  
るのみ更に東して鎌倉宮に詣て護良親王の  
幽閉せられ給ひしと云ふ岩窟を吊ふ九重の  
奥深く長せられし御身が朝敵を滅さんと謀  
をめぐらしつゝ却て逆臣の讒訴に逢ひ此岩  
窟の露したる所に名もなき一逆臣の手に  
かゝり萬斛の恨を呑んで御命を落し給ひし  
かと思へば水聲恨を訴へ禽語悲を傳ふ如き  
心地す此處より歩を返して建長、圓覺、長  
谷等の古寺をたづね極樂寺坂を通り稻村ヶ  
崎をぬけ夕映を身にうけつゝ足にまかせて  
七里ヶ濱を江の島にと向ふかくて腰越の古  
蹟もさぐり江島ある金龜樓旅館に投ず

東京かと思はれた。逍遙一時間の後又暑苦しい市中に出た。此所にて解散となり九段に或は芝に或は浅草に皆を欲する所に遊んで宿に歸つた。

五月廿七日 日曜日 鷹見 勳

何時もから清い曉をグラス窓に響く起鐘と共に水晶の様水に口嗽ぐ私達は、喧騒と黄塵との混濁した中に生温い鐵管の水を使つて顔を洗つた、室の前は土塀を環らしてブンと嫌な香がする、昨晩から髪へやう髪へやうと言つた宿に不快な夢を結んだ、蠅と給仕女の亂髪が眞實に穢い感じがする、殊に下宿して居る多くの支那人の學生に廓下あごで行遭ふものなら又とない嫌氣が溢れる、蘇水畔の清氣に包擁された一行は愈々こころ宿には辛棒が出来あくなつた、豈豚と同居せんやと袂を拂つて早朝此處を後に程遠からぬ表神保町の朝日館に移つた、清楚な小庭に八ツ手など植ゑられて可成の宿である、荷物を預けて電車で上野の眞都博覽會を見物した、明か朝を折々顔を拂ふ青風に兩側の樹々がサラ／＼と涼しく翻る、あれ程新聞や雑誌で持離された博覽會が餘り小規模なものには多少遺憾とする處か無いでもなかつた。

實に真相を現はして居る、其中に泉水を設けて潺湲の音が涼しい、懸賞で募つた變装の人達の色の浅黒い雲助、哀れな巡禮、嚴めしい武士、おごに折々行遭ふ何だか自分の頭にも蓄か有るではないかと思つた、更の中に這入つては臺灣館の緑濃い椰子に南国を夢み、朝鮮館や滿蒙館では彼の隠れた巨萬の富か白衣を着た土人の影から私達を呼びかけて居るのではないかと思はれた、其外塵に塗れた私達の眼に驚異を思はしめる物か決して少くはなかつた。

一行は十一時頃解散して各自に自由行動を取つた、一枚の東京地圖を汗の泌みる程握りつめて、洋服の襪れを氣にし乍ら田吾作式悠長な歩を運んだ私達は嘸見物であつたらう。

移るを知らなかつた私達は再び電車で青山に大將の墓を拜した、幾百萬の靈魂の漂ふ青山の墓地に只僅か鐵柵に圍まれ初夏の光に手向の煙のゆる／＼とやかな墓標、これこそ一家皆國に殉じた彼の大將の墓であつた或時は鬼神の如く或る時は愛の神の如く世界から畏敬せられ景慕せられた大將か此地下三尺に在るを思つては實に低個願望去るに忍ひあひものかあつた。

五月廿八日月曜日 井原 邦雄

本日も亦天氣清明にして一点の雲翳も無し遊子の意氣天も衝くの概有り、朝七時に旅宿を發したる一行は目黒に電車を捨てて目黒林業試験場を訪ふ。

して枝を交へ、悉く樹名を掲げて樹種を知るに便せり、一行は懇切なる案内に依り隈なく巡覽せしか、規模の宏大なる設備の完全なる、羨望の念に堪へざるもののみならず校内に熱帯植物を集めし温床あり、奇異なる形状をなせる植物は深緑滴るか如き葉を交へ、美葉植物は其の間に點在して花壇の如く、所々の壁間には赤や黄色の蔓草を纏せる有り、我等をして暫し熱帯中に遊ぶの感あらしめぬ、見終りたる時は己に三時なり、各自由行動を許されしかば三三五五打ち連れて或は千代田の宮に君か御稜威を仰ぎ奉り、或は泉岳寺に忠臣義士の墓を弔ひて、元緑の昔を忍び、或は乃木坂に上野に淺草に各自好む所に赴き午後六時半頃歸宿す。

五月二十九日 火曜日 大木多喜雄

瓦斯臭い風は用捨なく吾等か安眠を驚かせば夢の名残も醒め果て、仰げば碧空一片の雲なく今日も又旅の若人の心を躍らしむるのだつた、已か學舎にと、いそぐ學童の街路に賑ふ午前七時、旅装を整へ同八時、旭樓を出發して上野動物園を訪れた。

飼料を投じて彼等を伴として暫し興じるのであつた。

斯くて種々様々の珍禽奇獸も見終り、涼風や小鳥の音楽に送られて何時か歩は園外に在つた、團體で視察する豫定だつた博物館は時間の都合上、やむなく個人巡覽に任し同志、三々五々博物館に向つた。

十二時五分、發車一同は漸く東京市の喧々囂々と別れて青山緑水の日光に憧がれつ、暫しの間汽車にゆらるる身とあつた。埃にまみれた都路は、いつしか遠ざかり利根の鐵橋も過ぎた頃、涼風に戦く樺松等の平地林を見た時、身は車中にありながら心は遠き遠き木曾の開靜に歸り、神秘にさまようて居た。華かな都を厭ふと共に「來れ汝山の兒よ我抱擁せん」と云ふ黒い蘇山が懐かしかつた。

◎第一學年修學旅行記

口第一日 五月卅日 千田 瑞穂

『第一學年田立之瀧方面一泊二日にて修學旅行』と相場の定まり居たりしを、本學年度は四郡に渡りての大旅行、實にたいしたものあり。

四郡曰く、東西筑摩諏訪上伊那にて、費用實に大枚壹圓と七拾二錢九厘五毛。新調の洋服未着の爲前夜十時頃迄ステイションに詰めかけ、漸く受け取りたるはよけれど、舍に歸りて着用。然るに頭にあてる白き板なし、是は大變と飛び出して藤森迄。こんな喜劇も演ぜられき。

午前六時宮之越停車場集合の豫定なりし爲、汽車にて行くもの、日本男兒此健脚を持ちながら徒歩にて行くものなど、思ひ

思ひに定期の時間に集合す。臍緒切つて始めての洋服着用が大部を止め、其の敬禮たるや頗る珍奇なるもの多々ありて、上体を少しかゞめるもの、明治二十年式位の型をなすもの、其の狼狽實に滑稽百出たり。

頭の白き板甚しく痛みを感じ、旗揚八幡山吹山等の名所古跡を眺むるにも、暫時上体右向き左向きにて、體と頭と石の地蔵様然たり。

元來一年生の旅行は、毎日雨天也とのレコードを破り、照らず降らすの峠越日和なり。千峰越は盡せば更に万峯來りて、權兵衛さんが開きし苦心も嘸かしと察せらる。併し一人の落伍者もなく、伊那の茫漠たる一大平野に木曾の山猿が洋服に身を固めて飛び出した。

參々伍々として凡十里の峠越しにて疲勞せる足を投げ出し、伊那町第一の旅館箕輪屋に投宿す。夜は縣立伊那農業學校生徒廿餘名及び校長先生始め諸先生數名わざ／＼と出かけ下されて、茶菓にて大歓迎を受け、大いに歌ひ大いに語り伊那節に木曾節、農校々歌に本校々歌あざ打ち交へて底止する所を知らざる有様、散會己に十時半なりき。

□第二日 五月三十一日 一年 遠山 虎雄

昨日の難關權平の峠越にも些少の疲憊も無き我等六十の健兒は愈々勇氣激湧として八時宿舎箕輪屋を出發し天龍の清流に架せる長橋を渡りて上伊那農學校に至る。我が校と同じく縣立にして程度又同じ。吾々林業に對するに専ら農業を以てす。

其廣大なる演習地は若葉の香繁き桑園を始めとし新緑鮮かに影涼しき果樹園の綠玉麗はしき梨桃梅樹。僅に芽を出せし瓜芋の菜圃。將に色付かんとする麥瀧。其他養蠶家畜に至る迄秩序整然として一糸亂れず流石は農業の模範たるを思はしむ。

斯くて農學校視察を終へ上下伊那を縦斷して走れる伊那電鐵に乗じて辰野に向ふ。車窓より來し方遙に眺むれば伊那平を劃せる四方の連山は烟霞靄々として模糊の中に在り近き遠き村落は綠より綠を縫うて綠に映じ鐵を把りて田圃に耕耘する農夫諸君霞み込めぬ。

應て電車を終点辰野に捨て直に中央線鐵道に乗り替へ諏訪に向ふ。其間岡谷に下車す岡谷は諏訪郡に屬し我國貿易品中第一位を占むる絹糸の製造地として名高く其の盛衰處を見るも大小幾多の煙突は林立して天に沖し煤煙は雲を吐き白聖の四層五層の倉庫は軒を争ひ實に大偉觀なり。されば此處に集れる諸國の工男女は數方を數ふといふ。吾等は降らんとすに遂に降り出せし雨を冒して彼の製糸王を以て其名天下に高き片倉兼吉翁(此程没す)の經營に係る片倉

組製糸工場に至り場内隈かく參觀す。其規模廣大にして且精密なるには只管感嘆の外なかりき。岡谷驛を去る僅にして諏訪湖畔に出ず。時しも雨雲底く低れ上諏訪の人家も只雲煙模糊の間にあり諏訪湖は漁船の三四遠く近く浮べり。やがて汽車は湖畔を半周して先に雲烟の中に在りし上諏訪に着けり。而して第二の宿舎諏訪ホテルに旅裝を解く、時に午後六時ありき。

夜は慰勞茶話會を開きて各自獨特の十八番を發揮し感興至りて時の過ぐるを知らず、充分勞を慰するを得たり。

□第三日 六月一日 一年 村上 道信

待ちに待つたる修學旅行も最早今日一日にて終るかと思へば見るもの皆あつかし昨日來の雨も夜中に晴れて旅行日和となりぬ、六十餘名の健兒勇みに勇みて諏訪ホテルを出發せり、恰度此の日は諏訪中學のボートレースを諏訪湖にて催したるが我等一行は時間の許さざる爲下諏訪を経て鹽尻に向へり、時に午前八時過ぎありき。

下諏訪にては官弊大社(秋の宮並に春の宮)に參拜せり、流石は大社なり、殿閣壯麗、背後の森と相對して神威の身に迫るを覺ゆ己にして快晴ありし空は俄に四方の連山より奇雲を呼び見る／＼内に一天かき曇りありはれや／＼一行は又も雨ざらしとなりぬ

されど一行は物どもせず三々伍々打ち談じつゝ何時しか鹽尻峠の頂上に達せり、足を止めて來し方を振り返れば岡谷製絲場の煙突雲に入りて別れを惜むか如く諏訪湖は鏡を開きて我等の行を送る、さらば健在かれと歩を轉すれば塩尻町眼下にあり、心はやたけにはやれ共空腹なるを如何せん因て兼ねて用意の腰辨當を取出して空腹を充しぬ是に於てか元氣百倍し暫時にして鹽尻に達せり、直ちに農學校を訪ふ、先づ室内に入りて茶菓の接待を受け農園並に果樹園等を參觀せり、かくて同校を辞して更に近隣のるタワバイト製造會社を觀、夫より時刻の後れん事を恐れて停車場に急ぎ、五時八分乗車、洗馬贅川も夢の間に鳥居峠のトンネルを過ぐれば朝夕なれたる駒の雄姿は依然として一行を迎ふるが如し、かくて午後五時半木曾福嶋驛に着き樂しかりし旅行は茲に終りを告げぬ

和歌

□二見浦の夕 在美作 那 岐 雄

たゞひみり磯邊の砂の舟かげにいへば鹽のかほりうれし。此の夕風のなれば濱松の音も聞かず海はれむ。引き沙のさら／＼なる砂の上に鹽齧の列び黒き此背大いなるわたつみの面影にて引沙の波音にさ、やくさらさら引沙の波瀾火見入る我が足もさにつはれる哉。素足にて濱にそふて波踏めば鹽の香りの心地よきかもちらちらと一點の漁火月あれと霞のこめたる沖にきら

めく 友は皆町にいりけり我ひみり磯に出でたが、さびしき大聲に歌を歌へばもやこめし青白き沖に消て行くかもし

雑報

□去年のたび雑詠 日和山鳥羽港見ればかんかんミドツクの音の町にひゞける 紫の山の間なる青き江に白帆は入りて鳥羽は暮れ行く 大空をかける駕水みてる田の面にうつる伊勢の春かも 苗植ふし田の面の水に空かける鷹の一羽のかげのうつれる 五十鈴川の河の上には河鹿なき手すくふ水の玉のきらめき 神苑の樹齢さへれる女の音に我驚けり山のしづけき 衍幸の道路の煉瓦に日はりてい行く我等の氣はいらたたり

學校便り

◎倉監任命 島内教諭は六月廿二日付左の辭令に接し候 任長野縣立木曾山林學校倉監 島内 庸 明 ◎實習 夏季實習は七月十六日より開始せられ候が廿八日までにて終了の答其事業等左の如くにて候 一年 測量及測樹 二年 造林地刈拂、苗圃手入、農場手入 外に二日間駒ヶ岳登山 一年 事業二年に同じ 外に三日間御嶽登山 (但し午前七時始業正午終業、雨天の日は球算、習字、製圖、計算等を課す)

◎梅雨鬱陶たる天も月の初に於て愈々赫奕たる日の光に炎帝は車を驅り來り候此時實習は開始されて隨分辛い目も見候が、而し綠樹清陰に午睡の夢を食り碧流深潭に一日の汗を洗ふ愉快も有之候獨餘力ある英雄は炎天下テニスを開はし阿半擊突の壯技を試むるものも多々有之候

寄宿舎便り

我等の此宿舎の人となつたのは春また寒き四月の中旬で木曾の土地には數多の梅花は咲き残つて居て雪の降る事さへあつたが鳥見夕々初夏よりの新緑は始めて蕭條な木曾をなして活氣あらしめたが、やがて陰氣な霖雨の期に入つた、而し元氣ある舎生は相變らず健康で學業に餘念はなかつた。

六月二十日は忘れ難い水道落成記念日で我等入會以來初めてであるが聞くに水道なき時の我等の先覺諸氏は實に慘憺なる生活の有様なりしを前校長安藤氏の熱烈な御盡力によつて玉の様な水は炊事場湯殿洗面場等へ溢れ出でた日で其後三年間清らかなる水は十二分に水道を流れて居る我等は水道なき前の先輩に比し如何に幸福であるかは論を俟たない。其日早や午後四時頃には炊事員裝飾部員の方により食堂は全部美しく飾られた。周回は紅白の幕して張り廻し萬國旗赤提灯は我々を迎へる様に懸いて居る車上の馳走は山海の珍味ばかりで五十種類の電燈二個は果々として畫の様なものである本日校長先生倉監先生を始め諸先生の御來臨あつて五時頃に開會せられ、や、あつて時は餘興に移された車上の馳走の減せらるゝと反例に餘興の数は后から后からと續出して斬新奇抜珍類の餘興は聞く者をして抱腹せしむる有様であつた尺八、オルガン、ワイオリン等の興もあり殊に手品に至つては木職手品師も及ばぬ位の者も見られた出演者の隠し藝は遺憾なく吐露せしめ和られた。九時頃になつて校歌合唱あつて盛大無比の會も和氣藹々裡に閉された。七月二日より福嶋町にて名高き馬市は開かれた外出はあつたが例の驟雨の爲めに妨げられた而し馬匹の數の多い事は他地方の者には目新しく感じられた。山は益々濃鬱を加へ御嶽駒ヶ岳の露雪もいつか溶かされて避暑客、登山客等もちらほら見ゆる賑々客も杖を曳く木曾の土地は賑かさを増し實に山紫水明の眞價を表して來た。待ちかまへた夏期定期實習も揭示通り十六日より始まつた學課全線で畫迄であるから香氣な

もてて娛樂室の賑きは一通でない二年の諸兄は二十七日より駒ヶ岳登山一年は二十六日より御嶽登山であるもうそれさへ済めば入學後一刻も忘れた事のない歸省である懐かしい父母の笑顔も見られ又懐かしい故郷の山河は如何に我々の歸省を待つて居るだらうとそんな事まで思はれて早や遠からぬ歸省の日を指折り數へて待つて居る。

◎會員消息

◎松島長二君(豊後日田小林區署)より會長宛の一節を左に

當小林區は熊本大林區署内にて管轄區域の廣きに於て第三位に有之事務も中々多忙に有之在學中研學せし知識を實地に應用するに於て小林區は最好適地と存じ候當地区は九州にても比較的山中の事とて氣候は可なり涼しく町さへば町に候へ共浮華の傾向は皆無至つて實朴に御座候言葉なども却て木曾地方に比して方言少く非常に丁寧なる点に於ては不肖の最も豫想外とする處に候次に就任以來殊に感を深くしれる点を申述候役所にて差し當り最も必要とするは珠算に有之候珠算の如きは練習の如何によりては餘程まで上達する事をうるものに有之候職で考ふるに母校卒業生の林業の知識に於ては他の農林校卒業生に比して寸毫の遜色なく否却て上位に有之候も普通一般に必要とする珠算に至つては非常の遜色ありと云はざるを得ず候之は單に小生一個の感想のみに無之恐らく本年卒業生の大部は此の如き感想を抱かる、事と存候夫故珠算を上達せしむる方法としては小生は之を正課とし尙餘争心を誘發せしむる爲一級にても上中下の三位に分ちて練習せしむる事肝要と想考仕り寄宿舎に於ても自習終等の時を利用して室員擧つて練習に従事せば同室茶話會などの不經濟な話も持ちあがらずに有効に時間を使用しうる事と存候(下略)

◎會員異動

◎瀨在實君 靜岡縣山林課に轉任せらる

◎小岩井茂樹君 秋田縣花輪小林區署に赴任せらる  
◎赤羽高君 六月十一日付技手に任ぜられ帝林札幌支局上川出張所美瑛分館に赴任せらる  
◎新井清美君 本縣林務課に就任せらる  
◎樋口勳君 本月初日田小林區署に轉任せらる  
◎吉田佐十郎君 七月初日田縣林務課に轉任せらる  
◎木下禎藏君 横濱市大日本水道木管株式會社に轉任せらる  
◎上條芳郎君 滋賀縣内務部森林課勤務林業助手を命ぜらる  
◎宮下孝美君 山梨縣恩賜縣有財産管理課特別經營係業務編成課勤務を命ぜらる

◎會員の訃

高樋博君は年來の宿病なる肋膜炎を發し今春來靜養せしも抄々しからず六月初に至り縣技手を退職しひたすら療養に手を加へたるも藥石効なく全二十五日長野の假寓に於て長逝せられたり同君は母校第一回の卒業生にして卒業後は暫らく駒場大學林科の助手となり本多博士の提擧を受け歸りて縣技手たること多年有爲の人物として嚮望せられたるに今や即ち亡し痛惜に堪へず謹みて哀悼の意を表す  
◎左記吊詞は高樋氏葬儀の當日安藤林務課長が林務課を代表して朗讀せられたるものなり

吊詞

大正六年六月二十五日故長野縣技手高樋博君の爲永眠せられ本日君が葬儀を營まるに當り靈前に於て一言吊詞を述べんとす君は明治十八年五月二十五日長野縣西筑摩郡大桑村に生れ夙に志を林業に抱き明治三十四年木曾山林學校に入學し全三十七年同校を卒業するや更に東京帝國大學農科大學林學科に於て造林に關する試験並に之が事業に従事する事二十餘年明治四十年始めて官途に就き長野縣林業技術官に任ぜらる爾來君は其蓄積したる學識と經驗とを以て忠實職務に盡すこと二十年一日の如く本縣に於ける公私苗圃事業の改善は主として君が努力に俟つ所多く其他今日の如く縣下林業の進歩發達を見るに至りたるもの蓋し君の貢獻する所夥しとせば斯業の前途は尙一層君に嚮望する所大なるものあるに係らず本年四月突然病の犯す所なり爲めに六月十八日依願退職せらるの止むを得ざるに至るや同僚知己は皆均しく君が専ら靜養に力め早く快復に至らんことを祈りたりしに不幸病勢進終に起らず享年僅かに三十三前途有望の資を抱いて溘焉と

◎林友代領收報告

藤田要 吾君

大場、福、山兩教諭謝恩金募集  
加藤、征矢野兩書記謝恩金募集  
大場、福、山兩教諭及び退職せられたる加藤、征矢野兩書記並に今回退職せられたる福山教諭は多年本校及校友會の爲盡瘁され功績不尠候に付酬勞の爲聊か贈呈致度候間會員諸君は左記により御送金被成下此段得貴意候也

- 一、金額は別に制限を設けず
- 二、送金は校友會宛の事、但し誰に何程と御明記の事
- 三、締切期限は九月末日限り
- 四、受取證は差上ず本誌に發表の筈に候

◎弔慰金募集廣告

全窓高樋博君不幸五月初旬二翌の犯す所とあり遂に六月二十五日愛兒を遺し永眠せらる誠に痛惜に堪へず茲に吾々有志相謀り廣く弔慰金を募り遺族に贈り以て聊か全君の靈を慰め度に就ては本舉に御賛成被下度此段得貴意候  
追而弔慰金は九月末日迄に校友會宛にて御送付願度尙領收に付ては林友誌上に掲載可致候  
大正六年七月廿日

各位

- 發起人 但馬廣造
- 倉科浦一
- 仲侯伍
- 松澤莊太
- 遠藤正宗
- 齋藤雄作